

わたなべせいてい 渡辺省亭 七宝焼の原画を描いた画家

古田 亮
東京藝術大学教授

迎賓館「花鳥の間」には30点の七宝額絵が飾られています。無線七宝の技術でこれを制作したのはなみかわそうすけ 濤川惣助という七宝家ですが、その原画を描いたのはわたなべせいてい 渡辺省亭という日本画家でした。浅草の暮らしを愛した省亭は、江戸の美意識を頑なに守るタイプの画家でしたが、反面、その卓越したデッサン力や描写力は当時の日本画界では突出しており西洋人の眼さえも驚かせました。日本的な情緒と西洋的な写実が見事に融合した絵画世界は「花鳥の間」の作品にも見ることが出来ます。



わたなべせいてい 渡辺省亭 略年譜

数え齢

嘉永4年(1851)	1	12月27日(西暦1852年1月18日)江戸神田に生まれる
慶應2年(1866)	16	菊池容斎に入門
明治8年(1875)	25	起立工商会社に入社
明治10年(1877)	27	第1回内国勸業博覧会に《群鳩浴水盤ノ図》を出品
明治11年(1878)	28	渡仏。パリ万国博覧会に出品
明治13年(1880)	30	濤川惣助の無線七宝に協力開始
明治19年(1886)	36	鑑画会に出品
明治22年(1889)	39	山田美妙作「蝴蝶」に裸体の挿絵を描く
明治23年(1890)	40	多色摺木版雑誌『美術世界』(春陽堂刊行)を編集
明治25年(1892)	42	ロンドンのギャラリーで作品展示
明治26年(1893)	43	シカゴ万博に《雪中群鶏図》を出品
明治39年(1906)	56	迎賓館「花鳥の間」七宝額絵の原画制作
大正7年(1918)	68	浅草の画室で逝去

年譜の通り、明治中期までは内外の博覧会に出品し、時代の先端を走っていたことがわかります。《群鳩浴水盤ノ図》（右図、アメリカ・フリーア美術館所蔵）は、第1回内国勸業博覧会に出品された後、翌年のパリ万博にも出品されました。この機会に日本画家としては初めてパリに渡航し、ドガなど印象派の画家とも交遊したという経験をもっています。そして、明治20年代後半にはロンドンのギャラリーで個展が開催されるなど、当時としては考えられないようなグローバルな活躍をしていました。



《群鳩浴水盤ノ図》
（アメリカ・フリーア美術館所蔵）

それだけではありません。省亭の作品は欧米での評価が大変高く、メトロポリタン美術館、フリーア美術館、大英博物館をはじめとする、名だたる美術館では古くから作品がコレクションされています。晩年、版画集の刊行にあたっては「省亭画伯の名声は世界的にして欧米各国に知らる」とさえうたわれました。

それだけの実力者でありながら、今日では、省亭はほとんど忘れられた存在になっています。それにはいくつかの理由が考えられます。生前は文展や帝展で活躍した画家たちと肩を並べるほどの人気を誇ったにもかかわらず、画業の後半は美術団体に属さず、主要な展覧会や博覧会にも出品せずに、自ら画壇との距離を置いたことが一つ。また、震災や戦災のために現存する作品は少ないと思われており、長い間省亭に関する研究が進んでいなかったことも挙げられます。

ところが、ここ4、5年の間に国内外で多くの作品が確認され、小規模の展覧会も開催されるようになってきました。一方、詳細な評伝が刊行されて、その興味深い人物像が知られるようにもなりました。省亭を再検証しようという盛り上がりの中で、令和3年（2021）、その画業の全貌を明らかにする大型画集の刊行と、東京藝術大学ほかで大規模な回顧展を開催するに至りました。コロナ禍にあって、乗り越えなければならない苦難もありましたが、無事に展覧会の開催にこぎつけることができたのは、そうした気運の高まりがあったからです。

「花鳥の間」の七宝額絵が制作された経緯について、簡単に振りかえっておきましょう。明治32年（1899）、東宮御所が建設着工します。設計者は片山東熊です。明治38年（1905）8月、「花鳥の間」の室内工事が開始されるのですが、その壁面に七宝額絵を設置しようという計画が浮かびました。制作にあたっては、荒木寛畝の原画を並河靖之が七宝にするものと、渡辺省亭の原画を濤川惣助が七宝にするものとの二組のチームがコンペ形式で競ったことが知られています。明治39年（1906）、渡辺省亭・濤川惣助

ペアの採用が決まり、翌40年（1907）5月には最初の2枚が納品されました。全30点の完成、納品は明治41年（1908）1月でした。（参考：武藤夕佳里「七宝—旧東宮御所の《七宝額絵》をめぐる二人の七宝家と二人の画家」『家具道具室内史』第7号 2015年6月）

省亭^{せいてい}の原画は七宝技法によって極めて忠実に再現されました。それは、省亭^{せいてい}の「写生」描写と惣助の「無線」七宝とが、見事な相乗効果を生んだからです。省亭風^{せいていふう}と呼ばれた花鳥画の特徴は、花や鳥など、描く対象物をつぶさに観察し、記憶し、写生することを基本とし、それを淡い彩色によって生き生きと描き出すところにありました。とくに、輪郭線を極力抑えて、グラデーションと精緻な筆遣いで明暗や質感をリアルに表現するその技は他の画家には真似の出来ない境地に達していました。

一例を挙げておきましょう。下図に掲載した図版を比較して見ると、コンペで競った荒木寛畝^{あらかきかんぼ}の描く花鳥画（左）は、江戸時代以来の線描や構図を骨格として持っていて、省亭^{せいてい}の作風（右）に比べると堅い感じ、型にはまった印象を受けます。いかに省亭^{せいてい}の表現が軟らかで繊細なものかが分かります。（共に東京国立博物館所蔵）

濤川惣助^{なみかわそうすけ}の無線七宝^{ゆうやく}は、釉薬^{ゆうやく}を施す際に色の間仕切りとなる植線^{しょくせん}を焼成前に外すことで、輪郭線がなくなり、ぼかしやグラデーションの表現が可能となる技法だったことから、省亭^{せいてい}の作風とは大変相性がよかったです。二人は気の合う間柄であり、また妥協を許さないライバル同士でもありました。そのような二人の共同制作が実を結んだと言えるでしょう。通常、工芸作品の下図^{せいてい}という、ラフなデザイン画を思わせますが、緻密に描き込まれた省亭^{せいてい}の原画は、七宝の仕上がりを意識してか平素とは違う濃淡のある幅広い色遣いで描かれ、また楕円という特殊な画面が面白い構図をみせています。その完成度の高さでは、省亭^{せいてい}が常日頃に描いていた掛け軸などの本画と比べても遜色なく、迎賓館七宝額原画シリーズは、間違いなく省亭^{せいてい}の代表作とあって良いでしょう。



荒木寛畝《鶏》（東京国立博物館蔵）



渡辺省亭《矮鶏》（東京国立博物館蔵）